〈書評・文献紹介〉

マルク・ソーテ（堀内ゆかり訳）『ソクラテスのカフェ』

井　上　龍　介
東亜大学　人間科学部　人間社会学科
E-mail:inoue@toua-u.ac.jp

本書の著者マルク・ソーテ（Marc Sautet, 1942－）氏はパリ政治学院で教鞭をとる哲学の教師である。都市国家アテネで活動した古代ギリシアの哲人ソクラテスの故事にならって，街角の哲学を実践している。パリはシテ島のすぐ東に位置する，バスティーユ広場のカフェ「カフェ・デ・ファール（phares）」では，日曜日の午前11時から２時間ほど，数十人の客がテーブルを囲んで哲学談義に興じている。ソーテはこんなやり方で，カフェに支払う飲み物の代金以外は無料の，哲学の集会を開催している。どんなテーマをその日の論題にするかは，たまたまそこに集った人たちのうちの誰かの提案で決まる，つまり，議論の出発点は偶然に委ねられており，議論の行き先もまた然り。対話に参加するメンバーも，当日の個人の気紛れや決心に委ねられる。一つの問題を一緒に真剣に考えよう，これ以外に約束らしきものはない。誰もが自分の所有する語彙を精一杯に使って，なけなしの知識を披瀝したり，ささやかな思い付きを皆に聴いてもらおうとしたりする。職業も身分も多様な市井の人びとが，2500年の時を隔てつつ，舞台をアテネからパリに移して，ある主題をめぐる哲学的探究の場を共有するのである。

それにしても，これは随分と酔狂な試みではなかろうか。情報化された現代社会の市民的日常性のどこに，わざわざ集まって役に立ちそうもない議論にうつつを抜かす意義を見つけ出せるだろうか。目端が利く報道関係者は，そこに哲学者の売名行為，あるいは商業的意図すら発見できるのだ（ソーテは有料の「哲学相談所」を開設している）。参加する市民たちにしても，たんに好奇心を満足させたいのであれば，これよりずっと安易に，求める知識にたどり着く方法が幾らでもあるだろうに。また，埒もない会話（政治家のスキャンダル，畜産業者のストライキ，有名人のゴシップ，天候，恋愛，ホロスコープ，などなど）を楽しむのが目的なら，カフェでの会話から哲学者を追い出すほうがよかろう（彼は読む気も起こらない古典的著作を読んでみるように催促するので）。それとも，なにか異常な想念に憑依されたひとは精神分析家のオフィスを，伴侶の不倫に苦悩する良き家庭人は弁護士事務所を訪問すればよい。フランス革命を連想させる広場の片隅での定期的な哲学集会は，したがって，それ自体が世間の興味をそそる出来事であった。

カフェでの哲学的集まりといえば，サルトル，ボーヴォワールなど錚々たる文人たちのお気に入り，ドゥ・マゴでのそれを想起するひともいるだろう。そこでは，時として高度に専門的な議論も繰り広げられたことであろう。例えば，「集列」（セリー）と「集団」（グループ）の差異について，実存主義とマルクス主義の「同一の目的」について…。だが，サン・ジェルマン大通りから，こちら側，セーヌ右岸に目を転じれば，ソーテに会いに来た互いに見ず知らずの人びとが，「ずれ」や，「自明の事柄を否定する権利」や，「怒る義務」や，要するに即興のテーマを掲げて「哲学する」のである。ここで要求されるのは学識ではない。個人の思い込み（憶見）や世間の常識を一度「括弧」に入れて，事柄の真相を真摯に考える努力のみが要請されている。専門知識をひけらかしに来たひと，自分の信念に固執し，他人の意見を傾聴でき

ないひとは，やがて居心地が悪くなって去っていく。ここでは哲学者は思想の講義をしない。稚拙な意見を聞き咎めることもない。ただ，より深く考えを進めるためのヒントになりそうな質問や提案を集会参加者に投げかける。つまり，彼は参加者たちを教え導くのではなく，進行中の議論の道筋を照らし出すような示唆を与える――カフェの名称が暗示しているように（「ファール」は「灯台」あるいは「ヘッドライト」の意）。薄明に浮かぶ広大な問題領野に踏み込もうとするひとりひとりの市民は，デカルト以来のフランス哲学の良き伝統に則って，ひたすら「思考する主体」であり続けるよう期待されている。

ところで，なぜ，今，「哲学」なのか。ソーテによれば，哲学は現代科学の進歩によって「知」の領域から追い払われ，「さらに近年は，実践的人文諸科学に地位を奪われてしまった」。哲学は今日では「死んだ星，落ちぶれた神」と見なされている。しかし，倫理や道徳の諸問題（とりわけ，差別，麻薬取引，民族紛争，宗教的狂信，などなど）に関しては，いまだに，いやそれどころか「かつてないほどに」，哲学する理由がある，と，このようにソーテは主張する。現代社会の危機的状況は，ソクラテスが市民たちに対話を挑んだアテネの状況に驚くほどよく似ているのであり，「今起きていることを見ると，現代諸国家はあたかも，二千五百年前のギリシアの諸都市国家に決定的な打撃を与えることになった過ちを盲目的に繰り返しているかのようなのだ」。われわれの時代にくだされた，こうしたペシミスティックな診断に照らしてみれば，街頭で哲学することには「潜在的需要」が存在しているらしい。穿ちすぎかもしれないが，1968年の「五月革命」当時，ソーテは20代半ばであった。一切の束縛から解放されたユートピアを夢見た五月革命――「禁ずることを禁ずる」！――の残り火が，開放されたカフェでの市民啓発活動に潜んでいるとしたら…。

思い返してみると，フランスではしばしば哲学・思想が「事件」として注目され，「フェノメーヌ」（社会現象）として世間の耳目を驚かせてきた。アンドレ・ブルトンの「シュルレアリスム」運動，アルベール・カミュの不条理の哲学，そのカミュと激しい論争を展開したサルトルによるアンガジュマン（社会参加）の実践…。人びとはレヴィ＝ストロースの構造人類学に熱狂し，続くミシェル・フーコーの登場で，構造主義を打破する知の可能性に賭けようとした。実際，哲学好きの国民ではある。中等教育では哲学は主要科目のひとつであり，リセ（国立高等学校）の最終学年では哲学が集中的に教えられ，フランスの思想家を中心に西洋哲学の基礎が徹底的に叩き込まれる。また，よく知られているように，バカロレア（大学入学資格試験）では，文系の受験生は哲学の小論文と口述試験にパスしなければならない。フランス社会におけるこうした「哲学」重視の知的伝統が，ソーテの惹き起こしたささやかな「事件」を支えているのであろう。

パリジャンの称賛と批判を同時に招来したこの事件の現場は，市中いたる所に存在するカフェのひとつにすぎないが，自由な哲学的論議の場としてカフェが選ばれたことには，もちろんそれなりの理由がある。つまり，「カフェというのは，一般化した意見や多様な意見を理性という篩にかけるのに理想的な場所」だからである。カフェの集会では，誰もが気兼ねなく自分の意見を開陳できるし，誰もが思いつくままに他人の意見に異議をさし挟むことができる。その際，より多くの参加者の同意を得るのは，より多く，参加者たちの「理性」の承認を勝ち得た見解であろう。はて，理性の承認とはなにか。妥当性を判定されるべきその見解が，正しい前提から出発していて，論理的に矛盾なく結論に到っているか否か，妙な詭弁によって周囲を欺こうとしていないかどうか，が承認のポイントになる。各人が自らの理性のみを拠り所にして，よりいっそう共感できる見解を選択し，肯定しがたい意見に疑念を表明する。そのための主張，同意，また反論…。やがて物静かに皆の意見を聴いていた哲学者が，おもむろに発言する。ミネルヴァの梟たる哲学は，「すでに成されたこと，すでに言われたことを必要とする」からである。そこで哲学者は意見の対立点を明示し，議論全体を調整して解決の糸口を示唆し，またときには，衝突する見解の間の矛盾が安易に解消されえないことを告白する。

それにしても日本国の普通の喫茶店――この「喫茶店」という営業形態自体が特殊日本的であ

って，特殊フランス的な伝統に根ざすカフェという営業形態とは頗(すこぶ)る異質であることはさて置き――で，たまたま居合わせたお客さんたちの間にソーテのような「賢者の石」を投げ込むことによって，バスティーユ広場に発生した「フェノメーヌ」を再現できるかと問われれば，この手の実験はおそらく失敗するであろう（もちろん，われらが「喫茶店」で哲学を語ってはならない，などと言いたい訳ではない）。本書の原題“*Un café pour Socrate*”つまり「ソクラテスのためのカフェ」からすれば，これは「ソクラテス」を，「哲学すること」の換喩（métonymie）として解釈できようから，哲学＝愛知という実践に向けて利用される特殊フランス的なカフェ文化ということなのであろう。そしてこの世俗的文化に，古代ギリシアに淵源する対話の伝統が挿入されて成立したのがソーテの哲学集会（訳者によれば，同様の集会はその後「フランス全土で百あまりのカフェに飛び火」したそうである）であってみれば，「紅毛人の趣味にいちいち付き合っていられるか」と敬遠するひとがいても不思議ではない。さらに，本書を繙(ひもと)く日本人読者の翫賞(がんしょう)味読を妨げるのは，宗教，とくにキリスト教の『聖書』の解釈にかかわる議論である。

例えば，『旧約聖書』「創世記」冒頭には，人間の創造に関して二通りの語り方がある。神は創造の第六の日に自身にかたどって「男と女」を創造し，人間による全生命の支配と全植物の利用を約束して彼ら（男と女）を祝福した――この先行する記述では，禁忌の対象になる果実は存在せず，したがって人間が「原罪」を犯す可能性もない――というのがひとつ（「創世記」1‐1～1‐31）。そして，これに続く記述では，神はまず「土」（アダマ）の塵から「ひと」（アダム）を創ってこれをエデンの園に置き，「善悪の知識の木」の果実を食うことを禁じた。その後，神は眠っているアダムから抜き取ったあばら骨で「女」を創り，アダムに添わせた――後はご承知の通り（「創世記」2‐1～2‐25；3‐1～3‐24）。この二通りの語りは相互に矛盾しており，たいていの場合，それは無視されてきた。この事実がソーテのお客さんたちに大衝撃をもたらすのである。あとは読んでのお楽しみ。

紀伊國屋書店（1996年11月30日発行）
190頁　1,553円（税別）

＊　語句および人名について解説します。

①ペシミスティック：「悲観的」という意味。ラテン語pessimus「最悪の」より。

②五月革命：1968年３月22日，パリ大学ナンテール分校の学生反乱に端を発し，同年５月に労働者争議・政治危機にまで発展した社会運動。

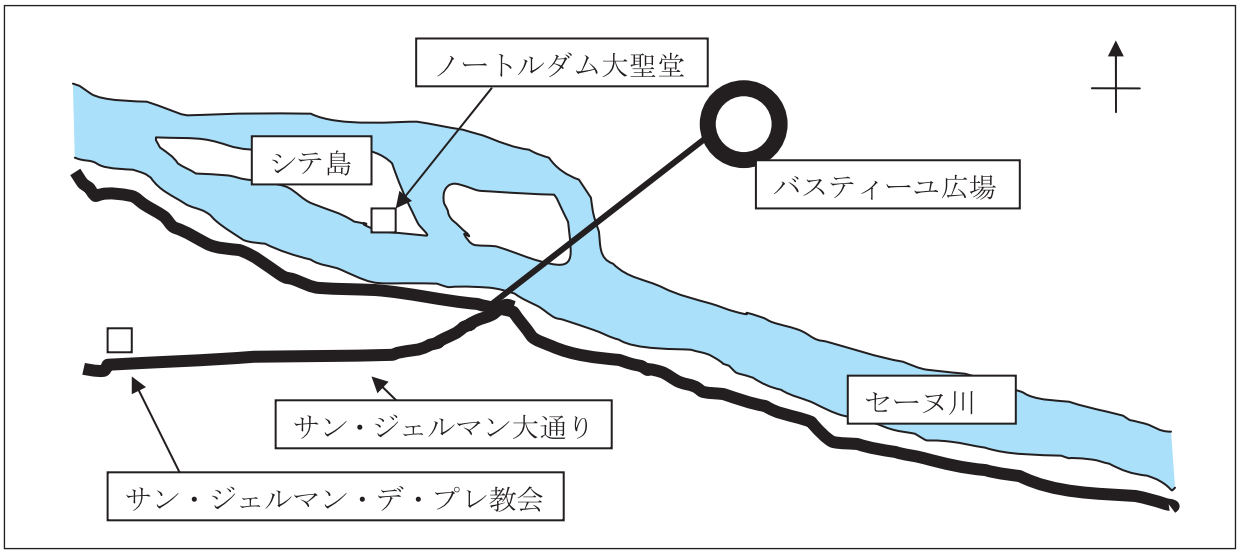
③シュルレアリスム：アンドレ・ブルトン（1896－1966）の主唱により20世紀初めに出現した芸術・生活革新運動。「超現実主義」ともいう。

④不条理の哲学：人間の行為や社会制度に潜む「不条理」（非合理性）を暴く思想。アルベール・カミュ（1913－1960）の小説『異邦人』，評論『シジフォスの神話』などに表現されている。

⑤構造人類学：レヴィ=ストロース（1908－2009）が『親族の基本構造』（1949）で試みた，家族関係の無意識的下部構造の解明を契機とする，人類学の新展開。同著者の『構造人類学』（1958）において定式化された。

⑥フーコー：ミシェル・フーコー（1926－1984）は博士論文『狂気の歴史』（1961）において，「理性」と「非理性」の分割が社会によってなされていることを糾弾した。その後，「知の考古学」を唱えて〈ポスト構造主義〉の代表的思想家と見なされている。

⑦ドゥ・マゴ：サン・ジェルマン・デ・プレ教会の向かいにあるカフェ（Café les deux magots）。サルトル，ヘミングウェー，ピカソなど文人や芸術家の溜り場だったことで有名。

⑧ミネルヴァの梟：G.W.F.ヘーゲル『法哲学』にある「ミネルヴァの梟は夕暮れになって初めて飛び立つ」から。「ミネルヴァの梟」は「哲学」の比喩。

パリ市，バスティーユ広場付近略図